

早く、現在地点に制止するのに精一杯で流れに逆らいながら景観を見る事などほとんどできない。海底景観はすばらしく、テーブルサンゴや赤くて美しいオオトゲトサカ等が咲いている。魚類もスズメダイ、ネブツダイをはじめとしてカゴカキダイ、ソラスズメダイ等が美しい絵模様をなしている。また一つ変わったものに水深約4mあたりに白く光る円板があり、透明度板を落したのではないかと思ったが、発光バクテリアが付いているのであろうかサンゴかカイメン状のものが白い板のように光っていた。

景観は美しいのだが流れの速いのが難点である。

海水の透明度は鹿島周辺よりも悪く、少し濁った所もあったが平均13~17mの透明度であった。また場所により透明度の良い所と悪い所の差が激しい。

観光性の点からいえば、この海域は海中景観がすばらしく近畿周辺や日本海側しか行かない人ならば驚くであろう。魚類も豊富で熱帯性の海水魚が色美しく遊泳しており、釣りには最適かと思われる所が多くある。

将来は岩松より西の海岸よりに諸施設を設け、道路整備を行いまた実際に水中に入り観察ができるように、船と共に潜水器も備えることが望ましい。

なお、現在では水中を荒している者はあまりないが、調査した所にも少々サンゴの採取されたような感じのする点もあり、水中保護も大切であろう。

近海は魚釣りには絶好の場所であり、釣りに関するP、Rも、もっと行うべきである。  
(関西大学文化会探険部報告書)

## 第四章 災 害

災害については、愛媛県は毎年のように災害を受けている。これらの災

害は件数の多少で必ずしも災害の大小を律するわけにはいかないが、各種の件数の統計をとってみると表1の通りとなる。

表 1

年 数	台風	%	豪雨	大風	かんばつ	雪害	雷	雹	計
1870~1879	9	69	2	1	1	0	0	0	13
1880~1889	14	70	2	3	1	0	0	0	20
1890~1899	12	75	1	0	3	0	0	0	16
1900~1909	10	37	9	3	0	4	0	1	27
1910~1919	16	67	2	3	1	0	0	2	24
1920~1929	9	31	8	2	2	5	0	3	29
1930~1939	10	46	5	0	2	0	0	5	22
1940~1949	10	67	3	0	0	2	0	0	15
1950~1959	22	50	7	10	3	0	1	1	44
計	112	53	39	22	13	11	1	12	210
10年間の平均発生件数	12.7		4.4	2.5	1.5				23.9

台風による災害件数が最も多く、全体の53%となっており、10年間に年平均12.7回の割合となっている。

次は豪雨、大風、かんばつの順になっている。もっともごく小規模の雷等は毎年数回あり、全部を件数に算入すれば非常に大きくなるが、ここでは小災害は省略されている。

台風の経路は主として西日本を通過したものである。西日本を襲った台風の全部が県に災害を与えたというわけではなく、昭和15年から昭和30年の間に西日本には47回の台風が来ているが、県には26回で前者の55%であった。

災害高についても、小規模の台風災害によるものよりも、まれに起こる猛台風によるものが圧倒的に多い。昭和18年7月の台風、昭和20年の枕崎

台風、および昭和24年のデラ台風、26年のルース台風による被害は激しんであった。

しかし、これらの気象災害にも地域住民は半ばあきらめ、半ばいたしかたないものとして、通過後の惨状に対して黙々とその復興につとめ、土にしがみついて生き抜いて来たのである。

次に示す災害年表は愛媛県史概説にあるものを主な出典とした。

津島町災害史年表

年 次		災 害 内 容	出 典 資 料
西 暦	年 号		
714	和銅7年10月	大 風	日本気象資料
763	天平宝字7年	旱 魃	愛媛県農業史
802	延暦21	凶 作	"
1420	応永27	旱 魃	日本気象資料
1531	享保4	地 震	伊予温古録
1578	天正6	洪 水	大洲古記
1596	慶長元・7	地 震	大日本地震資料
1605	" 9・12	"	"
1614	" 19	"	伊予温古録
1630	寛永7・5	不 時 降 雨	吉田古記
1631	" 8・8	大 風	"
1632	" 9	"	日本気象資料
1649	慶安2	地 震	大日本地震史料
1652	承応元	風 雨	伊予風水害小史
1666	寛文6	風 雨 洪 水	"
1673	" 13・5	洪 水	"
1674	延宝2・8	風 雨	"
1676	" 4・7	"	日本気象資料
1678	" 6・7	"	"
1679	" 7	"	"
1688	元禄元	地 震	大日本地震史料
1689	"	洪 水	日本気象資料
1689	" 2・7	風 雨 洪 水	伊予風水害小史

1694	元禄 7・5	大 風 洪 水	伊予風水害小史
1696	" 9	雷 雨 降 雹	東宇和沿革史
1700	" 13・7	風 雨	伊予風水害小史
1701	" 14・夏	旱 魃 洪 水	"
1702	" 15・7	風 雨 洪 水	"
1702	" 15・8	"	"
1707	宝永 4・8	風 雨	
1707	" 4・10	地 震	大日本地震史料
1715	正徳 6・5	風 雨 洪 水	伊予風水害小史
1721	享保 6・7	"	"
1722	" 7・6	"	"
1727	" 12・7	洪 水	"
1729	" 14・9	風 雨 洪 水	"
1732	" 17・5	霖 雨 虫 害 飢 饉	"
1734	" 19・4	強 風	"
1735	" 20・4	風 雨 洪 水	"
1736	元文元・6	洪 水	伊予風水害小史
1738	" 3・8	"	"
1739	" 4・6	風 雨 洪 水	"
1740	" 5	水 害	"
1748	寛永元・9	風 雨 洪 水	"
1749	寛延 2・4	地 震	大日本地震史料
1771	明和 8	旱 魃	"
1778	安永 7・6	風 雨 洪 水	日本氣象資料
1782	天明 2・7	"	伊予風水害小史
1786	" 6・9	洪 水 海 嘯	"
1791	寛政 3・5	風 雨	"
1792	" 4・7	風 雨 洪 水	"
1796	" 8・8	"	"
1799	" 11・8	風 雨	"
1802	享和 2・8	洪 水	"
1804	文化元・7	風 雨 洪 水	"
1807	" 4・8	洪 水	"
1812	" 9・7	"	"
1831	天保 2	風 雨 洪 水	"
1846	弘化 3・7	"	日本震災凶饉
1853	嘉永 6・5	旱 魃	伊予風水害小史

1866	慶応 2・7	洪 水	伊予風水害小史
1869	明治 2	飢 饉	愛媛県誌稿
1870	" 3・10	大 風 雨	東宇和郡沿革史
1873	" 6・6	暴 風 雨	新居郡誌
1874	" 7・8	大 風 雨	日本氣象資料
1875	" 8	旱 魃	東宇和郡沿革史
1876	" 9・9	大 風 雨	松山市誌
1877	" 10・1	大 風	"
1878	" 11・9	大 風 雨	"
1880	" 13・7	豪 雨・大 風 雨	"
1881	" 14・10	大 旱, 風 雪	明治編年史
1882	" 15・8	大 風 雨	日本氣象資料
1883	" 16・10	大 旱 魃・大 風 雨	"
1884	" 17・8	台 風	愛媛県誌稿
1885	" 18・10	大 風 雨	東宇和郡沿革史
1886	" 19・8	台 風	愛媛県誌稿
1887	" 20・10	"	松山市誌
1889	" 22・8	"	愛媛県誌稿
1890	" 23・7	豪 雨・台 風	松山气象台(創立)
1891	" 24・8	台 風	"
1893	" 26・10	台 風・旱 魃	愛媛県誌稿
1894	" 27・9	旱 魃・台 風	"
1895	" 28・8	台 風	"
1896	" 29・8	"	新居郡誌
1897	" 30・9	"	"
1898	" 31・8・9	"	"
1899	" 32・7	"	愛媛県誌稿
1900	" 33・7	"	"
1901	" 34・6	豪 雨	農会々報
1902	" 35・7	豪 雨・台 風	"
1903	" 36・7	豪 雨	"
1904	" 37・10	降 雹	"
1905	" 38・7	台 風	"
1907	" 40・2・4	大 雪・暴 風	"
1908	" 41・8	台 風・豪 雨	"
1909	" 42・8	台 風	"
1911	" 44・6	台 風	"

1912	大正元 9	台 風	農会々報
1914	" 3・1・9	暴 風 ・ 台 風	"
1915	" 4・10	台 風	"
1916	" 5・1	暴 風	"
1917	" 6・2	大 雪	"
1918	" 7・7	台 風	"
1919	" 8・7	豪 雨	"
1920	" 9・4・6	霜 害 ・ 豪 雨	"
1921	" 10・7	台 風	宇和島測候所(業務開始)
1923	" 12・4・6	霜 害 ・ 台 風	"
1924	" 13・9	台 風	"
1925	" 14・9	"	"
1926	" 15・7	豪 雨 ・ 旱 魃	"
1927	昭和 2・8	豪 雨	"
1928	" 3・4・6	霜害・豪雨・台風	"
1929	" 4・4・7	霜 害 ・ 旱 魃	"
1930	" 5・8	台 風	"
1931	" 6・5・10	降 雹 ・ 台 風	"
1932	" 7・7・8	豪 雨 ・ 台 風	"
1933	" 8・10	台 風	"
1934	" 9・7・9	旱魃・室戸台風	"
1935	" 10・6・9	強風霖雨・台風	"
1937	" 12・9	台 風	"
1938	" 13・7・9	豪 雨 ・ 台 風	"
1939	" 14・7	旱 魃	"
1940	" 15・5	霜 害	"
1941	" 16・4・10	霜 害 ・ 台 風	"
1942	" 17・8	台 風	"
1943	" 18・7・9	台風・枕崎台風	"
1946	" 21・7	台 風	"
1948	" 23・8	豪 雨	"
1949	" 24・6	デラ 台 風	"
1950	" 25・8・13	アイダ 台 風	"
"	" 25・9・14	キシア 台 風	"
1951	" 26・7・10	ケート台風・豪雨	"
"	" 26・10・14	ルース台風・旱魃	"
1952	" 27・7・8	旱 魃	"

1953	昭和28・6・9	豪 雨 ・ 台 風	宇和島測候所
1954	" 29・1・9	暴 風 ・ 台 風	"
1955	" 30・9	台 風	"
1956	" 31・1・6	暴 風 ・ 豪 雨	"
1957	" 32・8	台 風	"

## 追 記

岩松村誌によると「天明の凶作」というのは

天明 2 年 5 月 (1782) の大風

同 7 月 17 日 風雨洪水

同 8 月 20 日 風雨洪水

天明 4 年 (1784) 霖雨洪水

天明 5 年 (1785) 夏旱魃

天明 6 年 (1786) 夏淫雨

同 7 月 13 日から 17 日 強雨洪水

同 8 月 2 日 洪水

同 8 月 29 日 風雨高潮

同 9 月 27 日 洪水海嘯

天明 7 年 (1787) 春霖雨

同 4 月 25 日 大雨洪水

同 6 月 24 日 大雨

同 8 月 13 日 洪水

これら一連の天災によって、田畑を流され家を失ったため、食うにも困ったことをいうのではないと思われる。

同様に「天保の凶作」というのは、

天保 2 年 (1831) 初夏風雨洪水

同 5 月 20 日 風雨洪水

同 5 月 24 日、29 日 6 月 3、6 日の大雨洪水

天保 6 年 (1835) 5 月 14、21 日 7 月 6 日 風雨洪水

天保 7 年 (1836) 梅雨から 7 月まで 霖雨洪水

同 7 月 14 日 洪水

同 8 月 4 日 風雨洪水

以上の相次ぐ天災のため、作物実らず凶作に見舞われたものと思われ  
れる。

#### 「安政の地震」

地震災害の少い当地方で、旧各村誌に記録されている「安政の地震」というのは、安政元年 (1854) 11 月 5、7 日の大地震のことである。

宇和島藩には記録が残っていないが、松山叢談『池内家記』によると、城をはじめ家屋崩壊 1,273 軒土蔵並に納屋崩壊 1,038 軒、道後温泉湧出止まる。翌年 2 月末からまたもとのように湧出とある

当町でも 11 月 5 日 7 時半 (午後 3 時) から暮 6 時 (午後 6 時) 前まで、地大いに震い津浪数を知らず、7 日 4 時 (午前 10 時) また大地震、後も数は減ったけれども 12 月 29 日までやまず、屋根瓦を落とし、路にはきれつが  
でき、人心きょうきょうとしてやまなかった。』

以上は昔のことであるが、近くは

#### 「昭和 18 年の大洪水」

昭和 18 年 (1943) 7 月 21 日から 24 日にわたり県下は大暴風雨となる。これは 17 日サイパン島付近に発生した台風が北西に進み、21 日には四国南方 800 km の洋上に達し、中心示度 740mm となる。22 日 18 時には室戸岬南 500km の海上に達し、勢力はやや衰えて 744mm となり、23 日ごろまではほとんど停帯気味で 24 日に 748mm と衰え愛媛県を北上して日本海に出た。

この台風は不連続線の活動によって、九州東海岸、四国および中国地方の西日本では 21 日から 24 日にかけて降雨連続し、記録的暴雨となった。特に愛媛県では降雨激しく、肱川をはじめ各地の河川がはんらんして大災害を受ける惨状を呈した。

県下の被害状況を総合すると、死者 114 名、傷者 127 名、行方不明 20 名、家屋全壊 1,132 戸、同半壊 1,453 戸、同流失 911 戸、道路損壊 2,012 か所、堤

防決壊 1,074 か所、橋梁流失 387 か所、田畑流失 5,896 町、木材流失 9,339 石護岸損壊 36 件等となっている。

#### 県下の降雨状況は下表の通り

観測所名	21年	22年	23年	24年	総降水量
城 辺	58	475	235	102	870 mm
宇和島	125	346	362	109	942
宇和町	139	226	228	153	746
八幡浜	182	297	欠	欠	洪水のため
大 洲	147	欠	欠	欠	洪水のため
野 村	210	290	240	165	905
中 山	191	360	241	110	901
松 山	157	227	88	68	540
波止浜	135	111	55	30	331
西 条	52	127	115	93	387
多喜浜	84	145	114	32	375
三 島	41	108	99	52	300

この表のとおり南予地方が特に降雨量が多く、岩松川もはんらんし、濁流は堤防を越えて一面の海と化し、家屋流失も多く、河口の岩松は特にひどい状態であった。

当時は太平洋戦の最中で食糧増産は最大急務であったのに、この惨害で流出した田畑は多く大損害を来たした。

拝高以降の田はすべて水をかぶり、拝高の田は欠壊した堤防の土砂のため河原となり復旧不可能のところもできた。

勤労報国隊の来援で復旧作業は急がれたが、なかなか進まじょうせずまことに苦しい毎日が続いた。

#### 「昭和 20 年 (1945) 枕崎台風」

この台風は 9 月 17 日九州南部枕崎付近に上陸し、台風の中心の気圧示度、中心付近の風速および被害状況



洪水状況

いずれも昭和 10 年の室戸台風に優るとも劣らぬ優勢なもので、枕崎台風と命名された。

この台風は 12 日サイパン島の東方海上に発生した模様で、以後西に進

み同日22時ごろサイパン、グアム島の間を通過するとき中心示度752mmと推定され、その位置も正確になった。その後西北西に進み、後北に向きを変え17日6時には沖縄本島の南西約150kmの海上に達し、中心示度も720mm以下となった。ここから北北東に転向し枕崎付近に上陸した。その後九州東部を通り同18時には愛媛県の北西端を経、18日6時には能登半島の東方に去った。

本県でも17日県下全域は暴風雨となりじんだな被害を記録した。

観測所名	最低気圧	最大風速	総降水量
松 山	723.5mm	24.8m	120mm
宇 和 島	721.7	20.0	178
波 止 浜	725.2	16.0	138
佐 田 岬	—	50.0	—

## 被害状況

死者159名、傷者328名  
 家屋全壊2,655戸、同流失355  
 戸、橋梁流失254か所、道路損  
 壊1,342か所、  
 堤防決壊245か所、田畑流失  
 701町歩、船舶被害1,682隻

農作物は徹底的打撃を受け、海岸部の甘藷はつるをちぎり取られ、平坦部の収穫は皆無となったため、終戦直後の食糧難に一層の輪をかけた。食糧をあさる人達は、甘藷のつるや葉へいをちぎって食用にする悲惨さであった。